解説・報告

―産業動物臨床教育の現状と課題（Ⅳ）―

九州における産業動物臨床教育

上村俊一† 片本 宏 萩尾光美 堀井洋一郎（宮崎大学農学部教授） 末吉益雄（同准教授）
小島敏之 三角一浩 出口栄三郎（鹿児島大学農学部教授）

上村俊一

1 背景

九州・沖縄の畜産は，全国に占める飼養頭数割合が，肉用牛41.0％，乳用牛9.8％，豚27.3％，ブロイラー62.2％，採卵鶏25.8％（2005年農林業センサス）と非常に高く，北海道とともに日本の畜産業の屋台骨を担っている．また，地域での全産業形態に占める農林水産業の割合は高く，特に南九州では畜産業が最大であり，畜産農家並びに関連団体に従事している人口も多い．

この地域における産業動物教育として，獣医系大学が2校（宮崎大学，鹿児島大学）と畜産系大学が6校（九州大学，佐賀大学，宮崎大学，鹿児島大学，琉球大学，九州東海大学）あり，学生の教育を担当している．広大な畜産基盤を背景として，産業動物の実習・実務教育には最適の地であり，関係大学の教職員もその意識を持ち，教育に当たっている．

一方，産業動物の実習教育には，座学と異なり多大の労力と費用がかかるが，国立大学法人以後，地方大学における教育予算は毎年減少傾向にある．さらに，各大学とも産業動物教育に従事する教員数は必ずしも多くはない．また，大学教員に対しては，従来の臨床・教育・研究に加え，地域貢献，獣医師の学び直し教育への関与も要請され，臨床・応用獣医系教員は多忙を極めている．

2 卒業生の動向

宮崎大学：卒業生における産業動物関係への就職は，平成10年度10名／32名卒業，平成15年度13名／30名，平成20年度14名／33名と三分の一から半数を産業動物関係で占める（図1）．ちなみに，平成20年度の獣医学科入学生34名は，韓国の1人を含め全国にわたり，一方，同年度の卒業生は北海道NOSAIの4人を含め，また全国へ還っている（図2）．毎年実施している入学時の希望調査では，小動物分野が半数を占め，産業動物分野を志向する学生は30名中わずか1～2人である．しかし，卒業時には半数から三分の一が産業動物分野に進むことになり，6年間の獣医学教育並びに大学を囲む地域環境の重要性を痛感している．

鹿児島大学：卒業生における産業動物関係への就職は，平成19年度35名中産業動物分野に12名（国家公務員1名，地方公務員3名，産業動物診療6名，団体（家畜改良事業団，JA全農）職員2名）で約三分の一を占める（図1）．この傾向は，平成20年度卒業者についても変わらない．

3 宮崎大学の産業動物教育

授業科目として，臨床系の専門科目（内科，外科，臨床繁殖，放射線，寄生虫病学，獣医衛生学），動物感染症学の講義や産業動物臨床実習があり，講座外の科目として育種学，行動学，栄養学，草地学，飼料学，畜産学実習が草地畜産系講座により開講されている．付属動物病院において，小動物診療に加え，近郊農家から搬入される産業動物を診療している．また，スクールバスで30分の近郊にある農学部付属住吉フィールドでは，黒毛和種，乳用牛，中動物を飼育しており，獣医学生に対する牧場実習を実施している．獣医学生は卒業に必要な専門科目として149単位以上が科せられ，うち20単位は主に草地畜産系講座で開講される産業動物関連科目である．地域産業界との関わりで，宮崎県養鶏獣医師協議会から講師の派遣を受け，「家禽疾病学」や「動物感染症

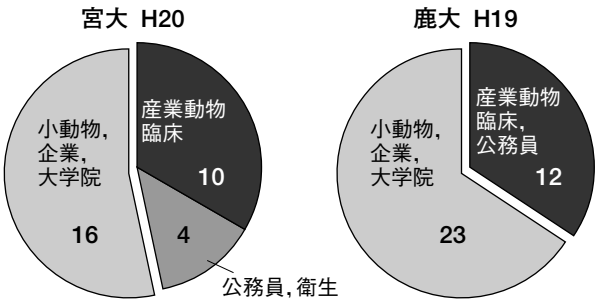

図1 学生の就職先

† 連絡責任者：上村俊一（宮崎大学農学部獣医学科獣医臨床繁殖学講座）
〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 ☎・FAX 0985-58-7787 E-mail : kamimuras@cc.miyazaki-u.ac.jp

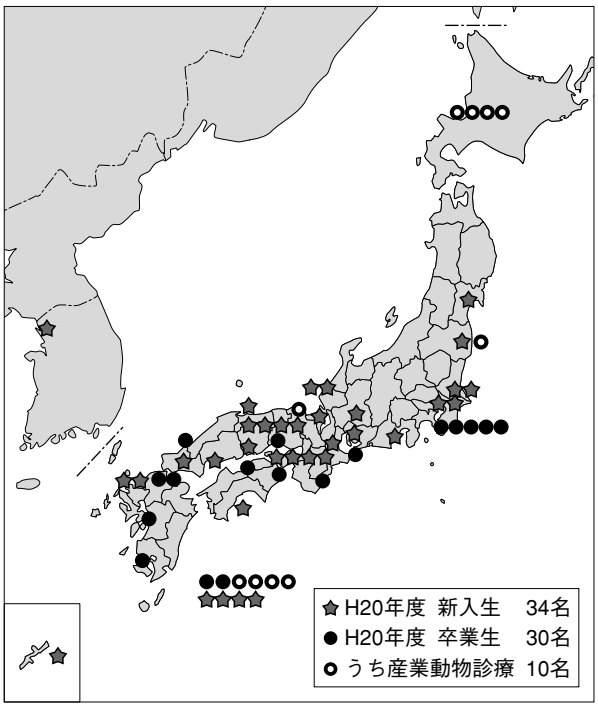

図2　宮崎大学の新入生の出身地及び就職先

実習」の教育を実施している．

4年生以上を対象とした学外産業動物臨床実習には所属講座を超えて学生が参加している．

・臨床繁殖学・内科学・寄生虫病学：外回り産業動物診療・実習．実習車3台（ワゴン2台，ダブルキャブトラック1台）を用い，毎週火曜日，主に黒毛和種を地元宮崎農業共済組合（NOSAIみやざき）と共同で検診している．年間1,000～1,500頭検診．
・臨床繁殖学講座：毎週月曜日に住吉フィールド検診，水曜日にNOSAIみやざき，宮崎県経済連（JA宮崎）と共同で酪農家乳用牛検診，週末は県外畜産農家へ出かけ，地元獣医師と共同で検診している．年間2,000～3,000頭検診．
・獣医衛生学講座：子牛と子豚の疾病診断を農場立ち入り検査，および実験室内検査で実施している．年間120～400件．管理獣医師との定期懇談会をもち，学生に対し実践的教育を実施している．
・解剖学講座：獣医師の依頼・協力で，主に子牛の病理・解剖を行う．年間100～150頭の牛を解剖している．
・人獣感染症プロジェクト：感染症系教員が担当する教育PJで，産業動物の寄生虫，細菌，ウイルス等の検査（年間3,000件）や放牧牛のピロプラズマ，その他の衛生対策を行い，学生が臨床教育として参加している（年間1,000頭の検査・治療）．

このように，産業動物に主体を置いた臨床教育体制が宮崎大学の特色である．

図3　鹿児島大学農学部付属軽種馬診療センター

4　鹿児島大学の産業動物教育

平成20年度，全国家畜畜産物衛生指導協会主催の産業動物就業研修（酪農学園大学，岩手大学，鹿児島大学）を実施した．参加者として，本学以外に，関東の大学生2名（4年生）が参加した．鹿児島県，NOSAI鹿児島等と協力して，産業動物獣医師の職場体験を研修した．本研修は，平成21年度も9月に2週間の計画で実施予定である．

平成20年12月に鹿児島大学農学部附属動物病院に軽種馬診療センターが開設された（図3）．これは，中央競馬会および日本軽種馬協会の寄付によるもので，今後九州の軽種馬診療の中心的役割を担う．また，学生教育および卒後教育としても活用する．

現在，鹿児島県の公務員獣医師による講義（15コマ）を獣医学科低学年向けの選択科目として設置する協議を進めている．

・週1回の頻度で，産業動物系に就職を希望する6年生を伴って病院検診車での学外定期診療を実施している（繁殖検診が中心）．その他，平均週3回，県内を中心に一般農家に出向いて採卵サービスを行っているが，産業動物系に就職を希望する学生が助手を務めている．
・産業動物獣医学分野（研究室）：産業動物の専門科目として，産業動物獣医学や家畜衛生学の講義・実習がある．実際に養豚場に出かけ実習教育を実施している．また，非常勤講師4名（臨床獣医教授制度：報酬なし）により，牛と豚の現場での実習と特別講義を実施している．研究室として，3養豚場（母豚4,500頭）に毎週出かけ，飼養管理，予防衛生と疾病診断検査（主に血清抗体価）を実施している．年間9万頭を検

査し，うち血液検査を年間500頭前後実施している．また，生産者団体との定期的な意見交換・勉強会，養豚研究会等へ参加している．

5　宮崎大学と鹿児島大学の教育連携

・文科省の財源補助による平成9～11年度における相互教育（10コマ），スクールバスによる学生移動での相互実習を実施した．実施する担当教員の負担は大きかったが，学生の評価は他大学教員の講義や実習を受講できることで，おおむね良好であった．
・平成20～21年度に鹿大・宮大獣医学科連携による集団就職説明会の実施．全国から行政，団体，企業が30社参加した．最南端にある両大学にとり，学生及び採用側からも好評であった．
・臨床系教育の相互実施計画：高度臨床教育，概算要求化の取組みを検討している．

6　ま　と　め

産業動物臨床教育については，地方大学が1校のみで充実を図ることには限界があり，現状では担当している臨床教員の負担も大きい．南九州における広大な産業動物基盤を控える宮崎大学と鹿児島大学は今後相互乗り入れで連携し，教育の充実を模索している．両大学は，過去の3年間，国内で初めて獣医学の教育連携を行った実績もある．宮崎大学において大動物の画像診断，手術施設，多様な家畜種を飼育する住吉フィールドにおいて，草地・畜産系講座との連携による実習教育，鹿児島大学における磁気共鳴装置，牛の受精卵移植技術および馬診療施設を用いた実習教育を行う．両大学の基礎および応用獣医学分野の教員も臨床教育に協力している．